

『山椒魚』の指導過程構成の試み

裴 崢

1 小論の目的

当研究誌第92輯に載せている小論では、中国人学生に日本文学の醍醐味を味わわせるため、井伏鱒二の『山椒魚』を教材として取上げ、『山椒魚』の指導に向けて、作品分析を行った。ここでは、その作品分析を踏まえて構成した表現課題方式¹⁾による『山椒魚』の指導案を提示する。

表現課題方式とは、作品の「場面」や構造を支える鍵となる表現に注目し、その表現の必然性、多義性を読み取れるような課題を設定し、授業で討論し、読みを深める方式だ。課題は、優れた表現を読みとる部分課題、場面の理解に繋がる表現を読みとる場面課題、作品世界の核に迫る表現を読みとる構造課題という3種を設ける。

「場面」は作品の質的な転換を現し、また必然性のあるひとまとまりを成す。『山椒魚』は7つの形式段落を独立させながら、それを重ねることによって、山椒魚の狭い岩屋に閉じ込められた惨状を突き詰めて、彼の悲しみを深めていくように構成されている。この形式段落を7つの場面として考えている。

指導案は上級日本語の課程にある中国人学習者とするものだが、その有効性の検証に当たって、まず日本人大学生を対象とする授業を試みた。

1) 詳しくは裴論文『文学作品の読みの指導方法としての表現課題方式』（北海道大学教育学部「教授学の探究」第13号、1996年、53～75ページ）にご参照ください。

2 『山椒魚』の指導過程

作品としては、1985年に出版された『井伏鱒二自選全集』からとってきたものを使用し、最初のページ数はp1とする。課題設定の諸方式は、以下のようになっている。

- ・想像的破壊————— 作品中の表現を他の表現と入れ替えたもの、または抜き取ったものを原文と比較して、もとの表現が意味するものを理解する課題。
- ・「曖昧」の読み取り —— 作品中の「曖昧」表現を一義的な表現、または同義に思えそうな他の形に置き替えたものを原文と比較して、もとの表現の持つ膨らみと広がりを読み取る課題。
- ・描写の種類————— 多くの描写から、同質の描写を対照的に整理し、異質の描写を発見し、表現の意味と効果を明らかにする課題。
- ・較べ読み————— 同一作品の二つの形式(改作前、改作後)、同じような題材、ストーリーの作品(同一作家のもの、ほかの作家のもの)を較べて読む課題(作品に対する広い読みをねらうが、主として構造課題として使う)。

ここで『山椒魚』の指導過程を示す。

全体の流れ

- I 導入 教師が作家井伏鱒二について簡単な紹介をする。
- 通読 作品全体を通し読みする。
- II 第一の段階の読み 表現の読み。
- III 第二の段階の読み 作品全体構造の読み。

では、II、IIIについて示す。

第一の段階の読み

場面課題 1 「山椒魚は悲しんだ。」(p 1, 1行)とあります。山椒魚が悲しみに至る客観状況とその状況での山椒魚の言動を表現する箇所とを拾い出して下さい。

答 状況：「頭は出入口を塞ぐコロップの栓となる」、「体を前後左右に動かすことができただけである」。

言動：「何たる失策であることか!」、「岩屋のなかを許されるかぎり広く泳ぎまはってみようとした」、「いよいよ出られないといふならば、俺にも相当な考へがあるんだ」。

ねらい 「何一つとしてうまい考へがある道理はなかったの」に、強がった受け止め方によって、悲しむべき状態をいっそう客観的に浮き彫りにする。山椒魚の抱える問題を確認し、悲しみの深刻さと表現の面白さの対比に注目する。

部分課題 1 「杉苔は最も細く且つ紅色の花柄の先端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な実を結び、それは隠花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らしはじめた。」(p 2, 9-11行)とあります。「可憐な」という表現が、三回も用いられています。その表現の効果を述べて下さい。

答 「可憐な」があると、苔は可愛らしいが、山椒魚は好まなかったという対比のニュアンスが強まる。主観的な感情をあらわす表現と植物の法則に関する客観的な描写との対照も面白くなる。

ねらい 苔は自然の法則で可愛らしく成長している。しかし岩屋に閉じ込められた、自然ではない境遇に陥っている山椒魚にとっては、目障りな存在である。苔を眺めることを好まない山椒魚の心情を理解する。

部分課題 2 「ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。^①そして小さな窓からのぞき見するときほど、常に多くの物を見ることはできないのである」(p ^②)

3, 2-4行)とあります。この文章は次のどちらだと思いますか。その理由も述べて下さい。

ア 語り手が、外の光景をのぞき見する山椒魚の様子を眺めて評している。

イ 語り手が、山椒魚の「好んだ」理由を山椒魚の立場から説明している。

答

答えは二通りになる。

①も②もイの場合：意外な発見、まるで哲学的な驚きを、山椒魚の気分の好ましい状態として述べている。狭苦しい所から一所懸命に外を見ようとする山椒魚の姿も気持ちもよく伝わってくる。

①はイ、②はアの場合：①の文は、一般化しているといえ、実際山椒魚の立場を語っている。山椒魚の直面する事態は客観的には悲惨だが、山椒魚は小さな窓からは多くの物をのぞき見することは現実にはできないことにまだ気づかず、心理的な錯覚をゆとりをもって楽しんでいる。②の文によって、この事実が指摘されている。外へ出られない山椒魚は、ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することしかできない。①と②の視点の転換によって、山椒魚の立場を揶揄する効果が出てくる。

ねらい

山椒魚の主観的な意識と客観的な状態とのズレによって、もたらされている表現効果を読み取る。

部分課題3

目高たちの様子を見て、連想される人間社会の出来事としてはどんなものがありますか？

答

決まった自分の考えも一定の見識も持たず、ただ他人の多数意見に忖もなく同意、同調する。人間社会にある付和雷同そのものが連想できる。

ねらい

この部分の表現をよく読んで味わう。目高たちの動きをイ

メージ豊かに読み取る。

部分課題 4

「山椒魚はこれ等の小魚達を眺めながら、彼等を嘲笑してしまった。」(p 4, 1行)とあります。「しまう」という補助動詞は、本文で次の二つの用法として使われています。

a 「花卉自体は水のなかに吸ひこまれてしまった。」

b 「彼は彼自身の背中や尻尾や腹に、つひに苔が生えてしまったと信じた。ここの「嘲笑してしまった」は、そのどちらの場合だと思いますか？また理由を述べて下さい。

答

b。「a」は、ただ吸い込む動作が完全に終わるという意味を示す。「b」は、生えるという行為の完了相をあらわす外に、それにともなって、ある具合の悪い状態になる意味が付加される。「嘲笑してしまった」は、山椒魚は思わず知らず笑ってしまった、つまりしてはいけないことをしてしまったというニュアンスが含まれているため、「b」の用法だと言える。

ねらい

山椒魚の尊大な性格及び評論家的な感覚に注目する。岩屋から出られない自分自身こそ「不自由千万」であることに気付かない山椒魚の愚かな見当違いを読み取る。

場面課題 2

場面 2 全体を静と動に分けるなら、どこで分ければいいと思いますか？

答

「常に多くの物を見ることはできないのである。」までは静であり、「谷川といふもの……」からは動の描写である。

ねらい

閉じ込められた狭い岩屋の中と新鮮で、自由な外の世界との対比、作品の抒情性に注目する。

部分課題 5

「この一ぴきの蝦は山椒魚の横っ腹を岩石だと思い込んで、そこに卵を生みつけてゐたのに相違ない。さもなければ、何か一所懸命に物思ひに耽つてゐたのであらう。」(p 5, 2 - 3行)とあります。「さもなければ」という言葉を使って短文を作ってください。また、本文の「さもなければ」と比べてみましょ

う。

答

例 もっと一所懸命やれ、～失敗するぞ。

はやく行こう、～間にあわない。

「さもなければ」は本来AかBかを平面上の選択として結びつける言葉だ。ここではAは蝦の客観的な状況だが、Bは山椒魚が考えた蝦のイメージである。「さもなければ」は平面上の対等な表現を繋ぐ言葉にはなっていない。どんな文を作っても、本文と同じようなパターンにならない。

ねらい

山椒魚の心理的な動きを、気取ったニュアンスを込めて、巧みに描いていることに注目する。

場面課題 3

「全く蝦くらゐ濁った水の中でよく笑ふ生物はゐないのである。」(p5, 13-14行)とあります。この文がないのとあるのを比較してください。あるとどういう効果がありますか？

答

作品のストーリーとは無関係そうなきりげない蛇足のように見えるが、それがあることによって、より複雑な意味が生まれる。山椒魚の置かれている状況は極めて滑稽だ。しかし、山椒魚のせいにしないで、蝦の「濁った水の中でよく笑ふ」習性に押しつけて語っている。同情の素振りを見せながら、実際その反対に山椒魚を嘲笑している語り手が見える。それによって、他のものを嘲笑してきたが、ついに「虫けら同然」の小蝦さえに笑われる身となってしまった山椒魚の事態がより深刻に描き出される。

ねらい

アイロニーの表現手法に注目する。

部分課題 6

「たった二年間ほど私がうっかりしてゐたのに、……」(p6, 3-4行)とあります。「たった二年間ほど」と場面1の「まる二年の間に」を比較して、その効果を述べて下さい。

答

「まる二年の間に」はたっぷりした二年間の長さを強調する効果があり、客観的に見て長い、山椒魚の主観から見て短い

ねらい

という可笑しさとともに弁解がましい能弁さをうかがえる。山椒魚と語り手の捉え方のギャップに注目し、山椒魚の愚かさを笑い、また真剣に神様に泣きすぎる彼の無自覚さ、可愛らしさを読み取る。

部分課題 7

「誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬へてみることは好まないであらう。ただ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなどと考へてみる。たしかに彼等は深くふところ手をして物思ひに耽ったり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭ったりして、彼等ほど各々好みのままの恰好をしがちなものはないのである。」(p7, 4-7行)とあります。「彼等」は次のどちらを指すのですか？ その理由を述べて下さい。

ア 不幸にその心をかきむしられる者

イ ブリキの切屑

答

イ。人間だと思ふと、文が変になる。「イ」だと、一見とてもそんなふうに見えないが、よく想像すると、「深くふところ手をして物思ひに耽ったり、……」という様子はまさに「ブリキの切屑」と重なってしまう。普通の言葉で気がつかないような新しい見方を示している。

ねらい

適切な隠喩とその面白さに注目する。

部分課題 8

「— どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がかかる常識に没頭することを軽蔑しないでいただきたい。」(p7, 14-15行)とあります。「かかる常識」はどんな常識を指していると思いますか？

答

目をつぶると、なにも見えないというだれでも知っている「常識」だが、山椒魚は「巨大な暗やみ」を、「際限もなく広がった深淵であった」と見ている。山椒魚の誇大妄想を描くことによって、その馬鹿馬鹿しさを強調する。

ねらい 「軽蔑しないで」といいながら、山椒魚はまさに軽蔑の対象だと思われるアイロニーの表現に注目する。

場面課題4

「ああ、寒いほど独りぼっちだ！」(p8, 1行)とあります。「寒いほど独りぼっち」な世界の始まりの箇所を文中から指摘して下さい。

答 「やがて彼は自分を感動させるものから、寧ろ目を避けた方がいいといふことに気がついた。」

ねらい 水すましや蛙などのいる「感動」の世界との訣別を読み取る。

部分課題9

「悲嘆にくれてあるものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。」(p8, 4行)とあります。「置いとく」の動作主は誰ですか？

答 動作主はいない。動作主がいれば、山椒魚をもとの状態に戻せばいい。ナンセンスである。

ねらい ずらしの表現手法によって、山椒魚の救いのない状態を強調する表現効果に注目する。

場面課題5

「お前は莫迦だ」

「お前は莫迦だ」(p9, 6-7行)とあります。同じ言葉を繰り返しているが、それぞれの中身を指摘して下さい。

答 蛙：俺は安全な場所にいる。出て行くか行くまいか、自分で決める。お前に見張られている以上、俺は出ていく筈はないのに、「出て来い！」というのは「お前は莫迦だ」。自然にしたがう蛙の姿勢だ。

山椒魚：蛙を食うために「出て来い！」と怒鳴った筈だが、その目的に達せず、「よろしい、いつまでも勝手にしろ」と閉じ込めることにした。相手を食う山椒魚の自然の姿から離れ、「お前は莫迦だ」と蛙を罵るが、中身のない言い返しにしか聞こえない。

ねらい 同じ言葉に込められている山椒魚と蛙の違う立場を読み取

る。

場面課題 6

二匹の前の口論と一年後の口論とはどんな違いがありますか？

答

「お前こそ頭がつかへて、そこから出て行けないだらう？」と蛙はずばりと山椒魚の痛いところをつく。前回の食われないための保身的な立場から、その相手を押し攻める立場に一転する。「お前だって、そこから出ては来れまい」と山椒魚は精一杯立ち向かうが、「すでに相手に」致命的な弱みを「見ぬかれてしまっ」たものの悲壮感も隠せない。両者は対立のままであるが、食うものと食われるものの自然体は精神的には崩れ始めている。

ねらい

山椒魚のますますの惨めさを理解し、単純な口論を繰り返す表現の滑稽さを味わう。

場面課題 7

さらに一年後の夏は彼等は「お互に黙り込んで」、「お互に自分の歎息」さえ「相手に聞こえないやうに注意してみた」(p 11, 3-5行) のです。それはなぜですか？

答

蛙は二年間たって閉じ込められてしまったという現実を受けとめざるを得なくなり、山椒魚は犠牲者を仕立てても自分を救い出すことができないと悟る。にもかかわらず、お互いに慰め、許しあうことができない。「歎息」さえ漏らさないやうに神経を使うのは、自分の惨めさを相手に知られたくない、相手を喜ばせたくないのだ。

ねらい

山椒魚の孤独と絶望を理解する。

III 第二の段階の読み

〈構造の把握、全体の読み〉

構想課題

このラストシーンには、改作前はさらに次の十数行がありました。二つの作品を読み、比較して見ましょう。

ところが山椒魚よりも先に、岩のくぼみの相手は、不注意に

も深い歎息をもらしてしまった。それは「ああああ」という最も小さな風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の歎息をそそのかしたのである。

山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかった。彼は上のほうを見上げ、かつ友情を瞳に込めてたずねた。

「お前は、さっき大きな息をしたろう？」

相手は自分を鞭撻して答えた。

「それがどうした？」

「そんな返事をするな。もう、そこから降りて来てもよろしい。」

「空腹で動けない。」

「それでは、もうだめなようか？」

相手は答えた。

「もうだめなようだ。」

よほどしばらくしてから山椒魚はたずねた。

「お前は今どういうことを考えているようなのだろうか？」

相手はきわめて遠慮がちに答えた。

「今でもべつにお前のことをおこっちはいないんだ。」

答 改作前：山椒魚は死に瀕する蛙の気持ちに気がかかる。「お前は今……ようなのだろうか？」と尋ねるのは、蛙が自分を責めているのかどうかを探ると同時に、自分のことを許してほしいと期待するからである。

「友情を瞳に込めてたずねた」山椒魚に、蛙は「今でもべつに……。」と「きわめて遠慮がち」に答えた。これらの描写から、恨んだり、抗争したりすることを経たから、どうにもならない現状をともに受け入れるため、結ばれた両者の痛ましいいたわりを示す和解の結末としても読み取られている。

しかし、山椒魚はやがて「もうだめなようだ。」という蛙の言

葉によって、自分の行いが結局蛙を死に陥れるに過ぎないのであったことに気が付き始めた。これに対し、「今でも……」と書かれているように、山椒魚に対する蛙の態度は変わっているわけではない。したがって、和解の結末として読むには無理がある。自分を閉じ込めるということでは、悲しみを紛らわすことができなかつた山椒魚が、その無意味さに気付いていなかった愚かさを蛙は見抜いていた。蛙の遠慮がちな言葉を聞いても、山椒魚は故意に閉じ込めてやった相手に許しを乞うつもりはない。それは屈辱的なことであるがゆえに、「お前は今どういうことを考えているようなのだろうか？」という、あの名せりふでしか山椒魚の気持ちを汲み取ることができない。山椒魚が完全な絶望へと落ちていくことを匂わす結末として読み取った方がより適切ではないかと思う。

改作後：「和解」説を誘発するような描写が削り取られた。さらに、静寂の世界に導く特徴があり、救い出しようのない極限状況の厳しさをより浮き彫りにすることができる。

3 『山椒魚』の授業

3.1 授業の展開の概要

1994年9月、7人の日本人大学生の協力を得て、私は2回、全3時間を使って、上述のプランで授業実践を試みた。7人の中で3人が高校で『山椒魚』を習ったことはあるが、あまり印象に残っていないようだ。私は場面ごとに学習者に作品を読ませてから、事前にプリントした場面ごとの課題をまとめて渡し、答えを書くようにと指示した。ここでは各課題についての反応、学習者の答えを示す。

場面課題1

慣れないやり方だったためか、しばらく戸惑った。課題を与える目的はゆっ

くり考えさせることだ、と説明したら、「じゃ、思った通りに書けばいいね」と安心したように、すぐにペンを進めるようになった。

状況について、「彼の頭は出入口を塞ぐコロップの栓となる」が2例、「頭が出口につかへて……。山椒魚の棲家は、泳ぎまはるべくあまりに広くなかった。」が2例あった。言動について、「何たる失策であるか！」が4例、「岩屋のなかを許されるかぎり広く泳ぎまわってみようとした」、「俺にも相当な考へがあるんだ」が各1例あった。

作品中の表現を拾い出して並べるだけに止まらずに、自らの言葉で説明を加えもしている。「『山椒魚は悲しんだ』とあるのはつまり、成長しすぎて岩屋から出れなくなったからであるが、直接的には、書かれていない。しかし、山椒魚がどんなにあがこうと、絶対にここから出られないであろうことは、p1, 2行で『永遠の棲家』という表記がされていることで、直観的にわかる。……『頭が出口につかへて外に出ることができなかった』というだけではなく、外に出る可能性がないということも、山椒魚が感じてしまったからだ。『何たる失策であるか！』この言葉の後、彼は何とかこの岩屋から脱出することを試みるが、動けば動くほど自分が脱出不可能であることを認識する。が、完全に脱出することをあきらめきれぬわけでもなく、あてもないのに『俺にも相当な考へがあるんだ』と喋りだしたりする。そんな哀れさもある」。

状況の厳しさとそれに対する山椒魚の甘さ、愚かさとのズレに注目し、「相当な考へ」の無意味さを理解している。また、次のような読みもあった。「まる二年の間に彼の体が発育したことで、その永遠の棲家から出られなくなってしまったことに、悲しみがある。これは、体の成長と精神の成長の差を意味するのではないか。気がつけば、外見は大人となっているが、内面（精神面）では、成長できていない。この差が悲しみをもたらす。永遠の棲家とは、“サンショウオ”の内面を表し、つまり彼は自分の殻にとじこもったままで、今現在まで生きてきた。今現在には、外界（社会）に対応できなくなっている現実（自分の姿）があり、その現実ですら“サンショウオ”は気づいていない」。

山椒魚の悲しみを体の発達と精神の停滞とのギャップに例えたユニークな読みだった。

部分課題 1

「山椒魚は、棲家である岩屋から出ることができなくなって絶望しているのとは対照的に苔類は生を謳歌しているところを印象付けている」。「繰り返し使うことによって強調しておいて、その直後に山椒魚が杉苔や銭苔を好まず疎んじさえするという対照を描いている」というように、山椒魚の哀れな姿と、花と実との対比を鮮明にした効果として読み取ることができた。

「この場合、苔の『可憐さ』は、サンショウオへの対比だ。サンショウオは、一般社会に対して、順応することを好まない。つまり向上心がない。だから、天井の上を見ることが嫌いなのだ。そこに於いて、サンショウオは内にこもり、精神も向上（成長）しない。サンショウオは、暗闇の中にいる不気味な存在。その不気味で、陰気な姿を、可憐という色彩（社会生活）と対比させることで、更に一層浮き上がらせている」。

場面課題 1 で「体の成長と精神の成長の差」に注目して読むという延長線での読みだ。少し読み過ぎという恐れもあるが、作品を自分の中に組み込んでしまおうとする意欲は積極的なことと評価できるのではないかと思う。山椒魚をわざわざ「サンショウオ」と片仮名で表記するのも、作品に自ら向かい合って自分の山椒魚を作り上げていく姿勢が伝わってくる。

口頭発表では、自分が以前山椒魚を飼っていた体験を語った人もいた。学習者の方から、なぜ山椒魚を登場させるかの疑問を持ち、それには、人間のことを言っているのではないか。人間はいろいろ考えるから、頭でっかちで、そのことと関連している象徴的な手法だ、また山椒魚には不気味さがあるところに一つの意味がある、と議論が活発だった。

部分課題 2

①も②も「イ」が 4 例、①は「イ」、②は「ア」が 1 例であった。「人によって、どっちの理解もできる」という意見もあった。

①も②も「イ」と答えた理由は、「アでは、興味深い内容をのぞき見る山椒

魚の様子ではなく、のぞき見ることとしている。イでは、のぞき見た結果、何が見えたかを書いているので、外からの描写ではなく、内面からの説明だといえる、「自分が出ることのできない、小さな暗い穴は、山椒魚の今の状態を表しており、『興味深い』と言っているのは、目の前の明るい場所に出ることのできない山椒魚の強がりのように聞こえる」、「山椒魚を通して、自分もその姿を投影しているから。そもそも、山椒魚が好んだ、というのではなく、人が好むことである（人間の本性）」。

①は「イ」、②は「ア」と答えた理由は、「ア」は文末を言い切りの形で終わらせている、「イ」は『興味深いことではないか』と語りかけの形で終わっている」。

両者ともそれぞれの主張にもとづいて、理由を正しく指摘している。しかし、もう一步踏み込んでこの表現効果を吟味してほしかった。

部分課題3

取り組みやすい課題だった。「目的もなく大学を受験することが多い」、「他に左右され、自分の意思がない」、「教祖が先頭になって、すべてを信じ、信者たちが前の人しか見ずに、ただ進んでいく」というように、大学受験という自分の体験や当時、話題になっていたオウム真理教などの宗教活動を身近な例として挙げてくれた。

部分課題4

全員が「b」と答えた。その理由は、「前の部分で生じた結果に対し、何らかの意識が生じている」、「無意識に思わずということが込められているから」、「自分では笑おうと思っていなかったのに、“思わず”してしまった」、「この場合、山椒魚にしても、苔が生えるのは、知らないうちに、“うっかり” “思わず”というニュアンスを含み、嘲笑してしまった、という点にも、そのニュアンスが含まれているため。aの『吸い込まれてしまった』のしまったというのは、自分の意志がそうされたくないのに、された時のことを意味しているので、明らかに、aは“うっかり”というニュアンスとは異なる」というように、表現の意味を正確に理解している。

場面課題 2

静と動の境として、「谷川といふもの……」からは3例、「山椒魚はこれ等の小魚を眺めながら……」からは1例、「若し或る一ぴきが藻の茎に邪魔されて……」からは1例、残りは無答案だった。後者の二つの分け方は場面2全体を考えて静と動に分けるというより、山椒魚の静と動、或いは目高達の激しい動きだしに注目した結果だと思う。すると、静と動の分け目を見出すだけに止まらず、その効果も考えさせるように課題を設定すればいいと思う。

部分課題 5

「勉強しなさい。さもなければ落第しますよ」、「急ぎなさい。さもなければ遅刻します」、「もっとなんでも食べるようにしなさい。さもなければ体が弱まります」、「早く金を出せ。さもなければこいつの命はないぞ」というように、いずれも正しい文でありながら、大学受験生のストレスや忙しさ、家で耳にする母親の口癖、テレビドラマのせりふなど、学習者の生活の雰囲気を感じさせてくる短文である。

自分の作った短文と文中の表現との比較について、次のように説明している。「“さもなければ”という言葉は分類すれば、接続詞になると思うのだけれども、この言葉をはさんで前に述べた内容に追加して、因果関係を強める際に用いる言葉だと思う」、「この短文の“さもなければ”は、“そうしなければ”という、仮定の役割」、「“そうしなければいけません”、というニュアンスを含む」というように、自分の作った短文の「さもなければ」の意味をちゃんと説明している。

一方、「文中の“さもなければ”は、二者を並べる役割」、「本文中の“さもなければ”は、そういう様子でなければ、こういう様子だという単なる区別のために使われた言葉。また、この作品の中で言えば、一匹（人）で物思いに耽っているサンショウオが、勝手に、自分と蝦を同じ物だと思い込みたいために、“さもなければ”という言葉を使って、それ以後の文章につなげたものと思われる」というように、学習者は本文の平面上の対等な選択になっていないことが読めていないことが分かる。

場面課題3

「コロップ」、「料簡」などの言葉の意味がまず確かめられた。今はほとんど魔法瓶ではなく、ポットなので、よく分からなかったのかと思う。5人は解答を書いたが、2人は白紙のままだった。

「これは山椒魚の気持ちで、こんな虫けら同然のエビに笑われたのが悔しく、負け惜しんでいる山椒魚が描かれている」というように、蝦のことが書かれているが、実際山椒魚の置かれている状況を物語っている、と理解している。

この表現があることで、「山椒魚のひとりよがりのみじめさを読者に表現する効果がある」、「この一文は蝦の視点からでも、山椒魚の視点からでもなく、完全に作者の視点から描かれているもので、山椒魚の感情から離れているので、非常に淡々とした感じを与えることで文調を作っているのだと思う」というように、語り手という言葉こそ使っていないが、語り手の視点による表現効果に注目してとらえている。

また、「濁った水の中というのは、“人の不幸を好む俗世界”で、蝦は読者の中でも、嘲笑するのが愚か者を指す。この文章があることで、サンショウオは愚かだ、と思う者に対して、またそう思った読者に対する批判で、読者に気がつかせる効果をもつ」というように、ここのアイロニーの表現手法を理解したうえでの、正義感に溢れる感想もあった。

部分課題6

「二年間という年月が短いものであるはずがないのに、その間、なにもせずにいた山椒魚が失敗をなんでもなかったことのように正当化しようとするのが、“たった”という言葉に表れていると思う」というように、「たった」という表現の「ただ」、「わずか」のニュアンスに注目している。

また、「“まる二年の間に”は二年の長さを客観的に表現しているが、それに比べて、“たった二年間ほど”は、山椒魚にとって二年間は、とても短い間に過ぎないのに、なぜ閉じ込められたのかという気持ちが込められている」、「“まる二年の”は作者からみた二年間で、長い年月、“たった二年”は山椒魚

からみた二年間で、短い年月、おなじ年月でも見方によって違っていることを示している」、「場面1の“まる二年の間に”は客観的な時間の長さであるのに対して、“たった二年間”は感情的であり、しかも人生を基準に考えて、さらにうっかりしていた期間として考えると短いとは思えない二年間を、“たった”と表現することで山椒魚の後悔を表現している」、「殻に閉じ込められたものの時間に対する感覚と、現実社会が変化する速度、時間とのギャップ。現実とのギャップを表現している。それにより、現実を知らないことの危険から生じる愚か者の愚かさを浮き彫りに」というように、「作者」の言葉を使っているが、山椒魚と語り手の捉え方のギャップに目を向け、そのギャップによってもたらされた効果を読み取れている。そして、ここでも、二人ほど「人生」ということにたとえて理解している。大学生ならではの読み方をしていると思う。

部分課題7

「ア」が5例、「イ」が2例であった。

「ア」と答えた理由は、「ブリキの切屑は、アがする各々好みのままの恰好の一つ」、「ブリキの切屑は不幸にその心をかきむしられる者の自らをたとえたイメージであり、実際に深くふところ手をして物思いに耽ったりするのは、その者自身であるから」。

「イ」と答えた理由は、「“彼等ほど”から、不幸にその心をかきむしられる者が、ブリキの切屑を高く評価しているとうかがえるから」、「切屑の形、恰好は様々である。“ふところ手をして……”や、“手ににじんだ……”という表現は、ブリキの切屑の形をたとえたもの。“者”と“もの”の違い。“者”は正に人だが、“もの”は人ではない」。

「ア」と答えた例が多かったが、その理由についての説明は2例しかなかった。「イ」と答えたのは2例だけだったが、「ブリキの切屑」への高い評価や、「“者”と“もの”の違い」への注目などを通して、それぞれきちんと理由を述べている。時間がなくて、発表ができなかったことは残念に思う。何気ない表現なのに、想像力を働かせて読むと、こんなに違う理解を導き出すこと

ができるから、面白い議論になるのではと思う。

部分課題 8

「絶望するということ」、「目を閉じると真っ暗になるという常識」、「自由を求めること」、「不幸に心をかきむしられる者のみがする想像や目を閉じるといような単なる形式的な行動」、「愚かな言葉で自分を譬えたり、社会から目をそむけ、殻に閉じ込めること」、「自分の幽閉されている部屋から解放してもらいたいと絶えず願うという常識」、「自分が一生閉じ込められる状況の場合、自らとても広がった深淵の中にいると思う常識、自由が限られていることを感じてしまうため、その自由を使わないと却って悲しみが生じる」といのように、答えはばらばらだった。「目を閉じると真っ暗になるという常識」の答えもあったが、「軽蔑しないで」という語り手の立場との組合せによって、もたらすアイロニーの表現効果に気づいたかどうかは、疑問である。

場面課題 4

「山椒魚はこれ等の活発な動作と光景とを感動の瞳で……」が3例、「目を閉ぢるとい簡単な形式が……」が1例、「彼は目を閉ぢてみた」が1例、「彼の目から涙がながれた」が1例あった。

3例もあった「山椒魚はこれ等の活発な動作と光景とを感動の瞳で……」の後に、すぐ「やがて彼は自分を感動させるものから、寧ろ目を避けた方がいいといふことに気がついた」であるので、山椒魚の外の世界への興味を持つことすらあきらめたことを表している箇所には十分注目したと理解していいと思う。

部分課題 9

「岩屋」、「神」、「作者」と答えはまちまちであった。「この文章の中では、サンショウオの運命を握っているのは、作者しかいない。文章中の神様も作者か」という意見もあった。学習者は作品を読むとき、どうしても作者と結び付けたかったようだ。

場面課題 5

6行目の「お前は莫迦だ」は、「暗闇の中、うっかりとしていつの間にかそ

の穴から出られなくなった状態と、悪党と化し、つまらぬことに痛快を覚えるサンショウオに対する言葉(社会に順応できないものへの言葉)、「山椒魚は自分が一生岩屋に閉じ込められるからといって、紛れ込んできた蛙を外に出られないようにしたって、山椒魚の出られないという状況は変わらないのに、ばかだ」。

7行目の「お前は莫迦だ」は、「山椒魚の言葉、こんな暗闇の中に紛れ込んだ蛙に対して、意味もないねたみから出た言葉(社会に順応しているものに対するうらやみから出る言葉)」、「山椒魚は頭のせんを抜かないかぎり、蛙は岩屋の外に出られないのに、“おれは平気だ”と強がったり、凹みから出てこないなどつまらない意地をはってばかだ」。同じ言葉に込められている山椒魚と蛙の違う立場を読み取っている。さらに「両者の立場を第三者が見れば、全く意味のないこと」も的確に理解している。しかし、6行目は「山椒魚が蛙に向かって言った言葉」、7行目は「蛙が山椒魚に向かって言った言葉」という読みもあった。

場面課題6

「一年前の口論はお互いに相手の行動に対しての口論だったが、一年後の口論は、岩屋から出ることができるかどうかという一つの問題に対しての口論」、「前の口論では山椒魚は蛙を食べたいと思い、蛙は凹みから出てくことを望んだが、一年後の口論では、お互いに相手の弱みを知り、それを突っ込んでみるが、自分の弱みも突っ込まれてるので、にっちもさっちもいかず、状況は変わらない。お互いに相手ができないと思いつつも言っている」、「一年間で、周囲の生物は全て成長している。しかし、二匹は変わっていない。“一年の月日が過ぎた”という文は短いですが、逆に時間の長さを表している。その長い時間の中で、他の生物は変化してゆくが、岩屋に於いては、意味のない争いによって、結局変わることがない。しかし、二匹とも、出ていきたいという気持ちがあることが言える」というように、表現に即して、学習者が自ら作品世界の膨らみを味わい、文学を読むことを楽しんでいる。

場面課題7

「お互いに共通の相手の弱い部分(岩屋から出ることが出来ない)が分かったので、今はただ単に弱みを見せないことに集中するしかなくなったから」、
「お互いに口論は無意味だと思ってやめたが、口論で気の強いことを言っているうちは気持ちの沈みのある程度隠すことができるが、黙り込んでしまった今は、歎息によって自分のなげきを相手に知られまいと意地を張っている」、
「死んだ。この作品では、死というの、第二の生として描いている。消えて、本当に自分の闇の世間へと入っていった。社会に順応して生きるものも、自分の殻に閉じ込めり社会に順応できないものも、所詮は死という点で、結末を迎える。つまり、“生”をどう生きるか、ということによって生の価値が大きく左右されるということを表す」というように、作品の表現を通して、それぞれ自分の中で深く受け止めている。

構造課題

改作前について、「蛙と山椒魚の会話からお互いは共通の弱みを持っており、それに悩んでいたという前提で喧嘩をしており、その愚かさを間接的に表現していた」、「死を前にした二匹が、今までの言い争いは全く意味がないことに気づき、また自分と相手を悟り、そこから友情が生まれた。死を前にすれば全く無となることを表す。二匹ともお互いを思う気持ちが生まれ、やっと本心を言うことができるようになった」、「お互いに相手に弱みを見せまいと神経を使っている、相手の弱みを見た場合は相手に優しい気持ちになる。弱みを見せて優しい言葉をかけてもらった者は、自分の弱みをさらけ出すことができる。蛙は山椒魚の辛い状態と同じ状態に置かれ、山椒魚の辛さ、寂しさを知り、山椒魚を怒る気持ちにはあまりなれなかった。自分と同じ辛さ、苦しさを持っている者に優しくできるのは、自分を慰めることである」というように、「和解」として読んでいる。

改作後については、「改作することで、二匹がそっと死をむかえることの効果をねらった。また、読者の想像にまかせ(下線は原文のまま)、作品そのものの中で、生という、まだ外界へ出られるかもしれないという可能性を残したのか。想像の幅を広げた」、「山椒魚と蛙の和解シーンがなくなり、お互い

に黙って歎息をもらさないように注意している場面で終わることにより、一層の深い闇が作品をおおい、読む人によっては、さらに暗闇が深くなると考えるかもしれないし、また最も深いところまでいったのだから、次は上がる一方で、希望という和解があるというように考えるかもしれないし、読み手に結論をまかせた。読み手の心のありかたによって結論はさまざまになる。」というように、学習者が想像力を働かせて、「ぜいたくな楽しみ」(鈴木貞美)を体験することができたが、表現に即して、作品そのものを正確に読みとる狙いには達することができなかった。

3. 2 各課題の評価と改訂の方向

小説を読むというのは、作者が何を考えて、何を感じて、どう表現したかを理解するではなくて、作品そのものの表現性を通して、自分が何を考え、何を感じ、何を思うかを楽しむためである。学習者は読むということを楽しんでいたと言えよう。

この方式についての学習者の評価は両極端だった。難しかったという学生もいれば、「文学にはもともと興味があったので、とても面白かった。文章の考え方、見方が少し身についた気がします」という学生もいた。ここでは、学習者から回収したプリントにもとづいて、各課題を評価し、不適切な、または取り組みにくかった課題については、改訂の方向を示したい。

○ 想像的破壊の課題について

作品中の表現を他の表現と入れ替えたもの、または抜き取ったものを原文と比較して、もとの表現が意味するものを理解する課題、たとえば場面課題3については、そのままよい。

○ 「曖昧」を読み取る課題について

作品中の「曖昧」表現を取り出して、その表現に含められそうな1つ以上の意味を書き分けて、どちらの意味かを答える課題、例えば部分課題7については、そのままよい。部分課題5については、学習者は、自分の作った短文は同じ平面上の選択ばかりなのに、本文のそうではない表現方法に気付

いていない。課題を出してもその表現性を読みとれなかったため、課題としては考える意味があった。学習者がこの課題に取り組みやすいため、「本当に同じですか」というように、教師による立ち入った問い方が必要だった。

○ 描写の種類の課題について

多くの描写から、同質の描写を対照的に整理し、異質の描写を発見し、表現の意味と効果を明らかにする課題、たとえば場面課題1, 2, 4については、ほぼそのままよい。

○ 比べ読みの課題について

同一作品の改作前と改作後の二つの形式を較べて読む課題、たとえば構造課題については、改作前と改作後を比較する課題だと、単純に「和解」と「非和解」を読みがちだ。だから、「比較して見ましょう」のかわりに、選択肢を挙げて、次のように問い掛ける。

構造課題

二つの作品を読み、次のaとbから一つ選択して、その根拠を述べて下さい。

a 改作前と改作後は本質的に結末は違います。

b 改作前と改作後は本質的に結末は同じですが、改作後の方が表現効果が増しました。

○ その他の型の課題について

部分課題8は「かかる常識」という表現の説明を直接求めた。しかし、漠然とし過ぎていたためか、学習者は戸惑った。作品中から説明できそうな幾つかの表現を並べて、その中から答えを選択させるように改訂する。

部分課題8

「— どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がかかる常識に没頭することを軽蔑しないでいただきたい。」(p7, 14-15行)とあります。「かかる常識」はどんな常識を指していると思いますか？ 次の中からもっとも適当なのを一つ選んで下さい。

1 彼の目から涙が流れた。

2 自分の幽閉されている部屋から解放してもらひたいと絶

えず願ってゐる。

- 3 目を閉じると真っ暗になる。
- 4 不幸に心をかきむしられる。
- 5 暗やみは際限もなく広がった深淵であった。

いわば、想像的破壊の課題に改訂する。

部分課題9については、「動作主」を「作者」と答えた学習者はいた。「作者」という言葉は、作品そのものを読むという表現課題方式の立場からは認められない答えだ。その主旨には導かなかつた。しかし、そういった読みの習慣をなくすためにも、こういう課題の設定には意味があると思う。「動作主」への確認は実に面白い。「動作主」を付けると、「誰」が「悲嘆にくれてゐるものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである」という構文になる。「誰」がを入れようのないことだと、すぐ分かる。

したがって、「置いとく」の動作主はだれですかというのではなく、次のように動作主に相当する言葉を入れるような問い方に改訂する。

部分課題9 だれが「置いとく」のですか、文中に補って下さい。

以上の改訂版にもとづいて、日本の学生を対象に授業実践を試みるとともに、中国人学習者を対象としたプランの構成が次の課題となる。